

看護科学生の母性意識

川崎医療短期大学 第二看護科 第一看護科* 川崎医科大学附属病院**

松本 明美 登喜 玲子* 酒井 恒美* 山口 玲子**

(平成5年8月23日受理)

Investigation of Motherhood Held by Student Nurses

Akemi MATSUMOTO, Reiko TOKI*
Tsunemi SAKAI* and Reiko YAMAGUCHI**

*Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kawasaki Medical School Hospital***

Kurashiki, Okayama 701-01, Japan

(Received on Aug. 23, 1993)

Key words : 看護科学生, 母性意識, 因子, 影響要因

概 要

看護科学生の母性意識の一般的様相を明らかにし、それに及ぼす影響要因を探る目的でアンケート調査を行い、多変量解析を用いて検討した。母性意識に関しては①すばらしさや喜び②拒否や苦痛の2つの因子が抽出された。それらに影響を及ぼしている要因として明らかになったものは「初経時の反応および月経障害」「子供の世話」「母親との関係」「分娩見学」「科・学年」等である。母性意識は、これらの要因の影響を受けながら発達しており、またその要因のかかわりは影響を受ける年代に左右されていることが示唆された。

I. 緒 言

母性性、あるいは母性意識は本能に基づくばかりではなく、生育史の集約として生まれ、発達していくものであると多くの研究で示唆され、それらを促進または抑制する因子が次第に明確になってきている^{1)~5)}。看護科学生は、健全な母性意識を形成する上で、重要な時期にあると思われる。

そこで本報は、看護科学生を対象として、母性意識を把握するために広く一般に用いられている質問の回答について因子分析を行い、母性意識の構造を明らかにするとともに、それに影響を及ぼす要因を探る目的で調査を行い、2~3の知見を得たのでここに報告する。

II. 研究方法

1. 対象および期間

対象 1992年本短期大学看護科に在学中の
277名

回収率91% 有効回答率82% (228名)

調査期間 1992年12月1日から12月31日

2. 調査方法

調査は無記名によるアンケート方法とした。

(1) 母性意識の調査

花沢⁶⁾の「母性理念質問紙」を用い、24項目の質問に回答を求めた。回答は非常にそう思う、そう思う、どちらともいえない、ちがう、非常にちがう、の5段階評定により求め、それぞれの回答に、1, 2, 3, 4, 5, のコードを付して集計した。

(2) 母性意識への影響の調査

母性意識の発達に関わるといわれている一般

表1 要因アイテムとカテゴリおよびカテゴリ別人数

要因アイテム	カテゴリー	人数
1. 初経時の感想	C1:うれしかった	39
	C2:不安・困った	22
	C3:イヤだと思った	34
	C4:恥ずかしかった	36
	C5:驚いた	75
	C6:何とも思わない	22
2. 月経障害	C1:障害がひどく我慢できない	39
	C2:障害がひどいが我慢できる	93
	C3:気にならない	77
	C4:全くない	19
3. 子供の世話	C1:したことがある	173
	C2:したことがない	55
4. 兄弟姉妹	C1:長女	101
	C2:まんなか	39
	C3:末っ子	71
	C4:一人っ子	17
5. 母親との話しや相談	C1:よくする	141
	C2:時々する	72
	C3:ほとんどしない	15
6. 母親への愛着	C1:非常に好き	100
	C2:好き	99
	C3:あまり好きでない	22
	C4:全く好きでない	7
7. 母親との同一化	C1:になりたい	108
	C2:どちらともいえない	92
	C3:なりたくない	28
8. 父母の仲	C1:大変仲がよい	82
	C2:まあ仲がよい	108
	C3:あまり仲がよくない	23
	C4:仲がわるい	8
	C5:わからない	7
9. 妊娠婦	C1:身近にいる	107
	C2:いない	121
10. 分娩見学	C1:第一期から見学	73
	C2:第二期から見学	36
	C3:未見学	119
11. 科・学年	C1:1N1年	50
	C2:1N2年	39
	C3:1N3年	41
	C4:2N1年	52
	C5:2N2年	46

的見解および母性看護学履修など、表1に示した11アイテムを取り上げ、それぞれのカテゴリのどれかにチェックを求めた。

3. 統計学的解析

多変量解析には因子分析法および数量化理論第1類を適用した。因子分析には主因子法(ヤコビ法)・バリマックス回転法を用いた。抽出因子数は固有値が1.0以上を基準にして決定した。また平均値の差の検定には、t検定を用いた。

III. 結果および考察

1. 母性意識の構造

24項目の質問に対する回答について因子分析を行った結果、2つの因子が抽出された。次いで、因子負荷量0.4以上の16項目の質問に対する回答を取り上げ、再度因子分析を行った結果は表2のようである。それぞれの因子を『すばらしさや喜び』『拒否や苦痛』と解釈した。

各因子に属す質問の得点の平均値を因子得点とし、全被験者でみた因子別平均得点は表3に示すようである。各質問の回答の得点は因子負荷量の符号に注目し、第1因子ではそれを肯定する回答のコードが高得点になるように5, 4, 3, 2, 1点を配し、第2因子ではそれを否定する回答のコードが高得点になるように1, 2, 3, 4, 5点を配した。平均得点において、『すばらしさや喜び』は肯定する側に、『拒否や苦痛』は否定する側にあり、両者間には有意の差が認められた。『すばらしさや喜び』を肯定する意識

表2 母性意識についての各質問の因子負荷量

因子	質問	因子負荷量	固有値	累積寄与率			
第1因子 すばらしさや喜び	1. 妊娠はすばらしい出来事	0.549	3.400	21.25%			
	2. 出産は女の特権	0.535					
	4. 児を無事生むためなら苦しみを我慢できる	0.425					
	5. 子供を生むことは生きた証	0.450					
	7. 子供を生み育てることは自己成長	0.503					
	8. 子供がいると生活がより楽しい	0.502					
	10. わが子のためなら自分を犠牲にできる	0.467					
	11. こどもを育てるのは生みの母が最高	0.449					
	12. 結婚生活を楽しむために子供を作らない	-0.444					
	17. 早く子供を生みたい	0.445					
	第2因子 拒否や苦痛	3. 妊娠した自分の姿はみじめだ			0.409	1.111	28.20%
		6. 女だけが妊娠や出産をするのは不公平			0.566		
16. 子供が好き		-0.436					
19. 陣痛は我慢できる		-0.563					
21. 育児に追われていると若さが失われる		0.463					
24. お産にたいして恐怖心や不安がある		0.568					

表3 母性意識の因子別平均得点

因子	例数	平均値±標準偏差	t検定
第1因子	228	4.01±0.44	**
第2因子	228	3.40±0.58	

**p<0.01

の方が『拒否や苦痛』を否定する意識より強いといえる。

このことは、調査対象である学生が次代を担う母性であるとともに、母性保健指導のメンバーとなる立場にあることを考えると好ましい結果であるといえる。他の職種と看護職との母性意識を比較した新道ら⁷⁾の調査において、看護職の専門教育を受けることによって「女性はすばらしい」「母親はすばらしい」等の母性意識が好ましい方向に変化することが示されており、本調査でも同様な結果が得られた。それが、看護婦を志す特定集団の本来の素質によるものか、自己形成の発達上の現象か、あるいは看護教育の影響によるものかは明らかではない。

2. 母性意識に及ぼす諸要因の影響

母性意識の因子分析によって求められた2因子それぞれの因子得点を外的基準とし、表1に示した11のアイテムを要因に取り上げて数量化理論第1類による解析を行った。偏相関係数が小さいアイテムを除き、各アイテムのカテゴリの重み値を示したものが表4および表5である。第1因子については重み値が+で、その絶対値が大きいほど『すばらしさや喜び』を肯定する側に引っぱることを、第2因子については重み値が-で、その絶対値が大きいほど『拒否や苦痛』を肯定する側に引っぱることを示す。

以下、注目すべき所見を取り上げて考察する。

1. 初経時の反応および月経障害について

初経時に、不安であったり、イヤであったり、驚いたり、恥ずかしかったりという否定的な反応を示した者は73.2%と、他の調査結果(73~83%)⁸⁾⁹⁾と同様に高率であった。

この要因は第1因子、第2因子の両者に影響を与えており、特に否定的な反応の中で「イヤだと思った」は『すばらしさや喜び』の因子を強く否定する側に引っぱっており、『拒否や苦痛』の因子を肯定する側に引っぱっている。「イヤであった」という反応は「不安や驚きや恥ずかし

表4 諸要因の母性意識第1因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	0.053	0.167	0.211
	C 2	0.046		
	C 3	-0.158		
	C 4	0.024		
	C 5	0.020		
	C 6	-0.002		
I 2	C 1	0.050	0.108	0.136
	C 2	-0.034		
	C 3	0.037		
	C 4	-0.085		
I 3	C 1	0.027	0.112	0.111
	C 2	-0.085		
I 6	C 1	0.046	0.121	0.174
	C 2	-0.010		
	C 3	-0.128		
	C 4	-0.122		
I 7	C 1	0.061	0.210	0.222
	C 2	-0.106		
	C 3	0.115		
I 8	C 1	-0.028	0.112	0.224
	C 2	-0.009		
	C 3	0.040		
	C 4	0.119		
	C 5	0.196		
I11	C 1	-0.080	0.224	0.266
	C 2	-0.032		
	C 3	0.186		
	C 4	-0.065		
	C 5	0.023		

表5 諸要因の母性意識第2因子得点に及ぼす影響

要因	カテゴリー	重み値	偏相関係数	重み値のレンジ
I 1	C 1	0.082	0.209	0.384
	C 2	0.194		
	C 3	-0.190		
	C 4	-0.084		
	C 5	0.004		
	C 6	0.077		
I 2	C 1	-0.220	0.208	0.383
	C 2	0.013		
	C 3	0.056		
	C 4	0.163		
I 3	C 1	0.047	0.155	0.194
	C 2	-0.147		
I 5	C 1	-0.036	0.150	0.361
	C 2	0.003		
	C 3	0.325		
I 6	C 1	0.037	0.122	0.401
	C 2	0.005		
	C 3	-0.077		
	C 4	-0.364		
I 7	C 1	0.058	0.099	0.111
	C 2	-0.052		
	C 3	-0.053		
I10	C 1	0.131	0.168	0.238
	C 2	-0.107		
	C 3	-0.048		
I11	C 1	0.010	0.255	0.437
	C 2	-0.059		
	C 3	0.261		
	C 4	-0.176		
	C 5	0.005		

かった」という反応とは異なって、他の要因、たとえばまわりの人からの拒否や中傷やマイナスイメージの伝達などと複雑に重なった結果のようにも受けとめられる。そうであったとしたら、それは初経教育上の問題として考慮を要するところである。

月経障害は一般的見解と実によく一致する影響を及ぼしており、「がまんできない」「がまんできる」「気に入らない」「全くない」の順に『拒否や苦痛』の因子を肯定する側に引っぱる属性となっている。つまり「がまんできない」は『拒否や苦痛』感を強め、「全くない」はその意識を弱める。

母性意識の発達には、女性としての自己受容、自己認識が重要な関係を持っており、殊に初経の経験はそれらに重大な影響を与える⁸⁾といわれ、また初経を否定的に受け止めた者はPMT(月経前緊張症)や月経障害が強いとの報告⁹⁾もあり、月経障害という刺激は母性であること自体を苦痛に感じさせ、母性性を拒否する意識を生み出す可能性があるといえる。これらのこともふまえ、母性意識の育成にとって初経時の反応の重要性を認識し、親や教師、男子生徒も含めた初経準備教育の更なる充実が望まれる。

2. 子供の世話について

子供の世話をしたことのある者は75.9%で、思春期女子について調査した結果(70.0%)¹⁾より高い傾向があった。

子供の世話をしたことがあるは、第2因子『拒否や苦痛』を否定する側に引っぱっている。母性意識を形成、発達させる要因に幼い子供の世話の経験が重要である¹⁴⁾といわれて久しいが、本研究でも同様の結果が得られた。

3. 母親との関係について

母親との関係が母性意識に及ぼす影響を、母親との話しや相談、母親への愛着、母親との同一化、および母を支える性役割に着目し、父親と母親の仲の4アイテムを要因として取り上げて検討した。母親があまり好きでない、全く好きでないは『拒否や苦痛』を強く肯定する側に引っぱる属性で、『すばらしさや喜び』を否定する側に引っぱる属性であった。しかし、「母親との同一化」の面では、母親のようになりたくないが、また父母の仲が悪いが『すばらしさや喜

び』を肯定する側に引っぱる属性となっている。この結果はなぜであろうか。大学1～2年生の時期に英文科の学生は、自分の将来の母親像を自分の母親のイメージによって描いている者が多いのに対して、児童学科の学生は、自分の母親のイメージを否定している者が多く、すなわち、後者は自分の中に自分なりのイメージを作ろうとしているのではないかと推定されるという興味深い報告¹⁾がある。この推定をあてはめて考えるならば、この時期の学生が母性看護学等の専門教育を受けていることに関連して、現実の母親の姿や父母の仲を否定的に考えつつ、自分の中に望ましい母親や父母のイメージを作っているのではないかと説明できる。したがって、この「否定」が母性性の発達に何らかの重要な役割を持つか否かは、今後の課題として注目したい。

「母親との話しや相談」は、第2因子『拒否や苦痛』のみの影響要因であるが、話しや相談をしないが『拒否や苦痛』を強く否定する側に引っぱる属性で、一般論では説明に苦慮する。ただし、会話の頻度では母性意識に有意の差は認められないとする報告¹⁰⁾もあり、今後「話しや相談」の頻度と内容を明確にした上での検討を試みる必要がある。

4. 母性看護学履修について

母性看護学履修の影響をみるため、科・学年および、分娩見学の有無について検討した。

分娩見学は第2因子『拒否や苦痛』の影響要因であった。分娩第一期からの見学は『拒否や苦痛』を強く否定する側に引っぱる属性となっており、分娩第二期よりの見学および未見学は『拒否や苦痛』を肯定する側に引っぱる属性となっている。通常分娩第一期は初産婦で10～12時間、経産婦で5～6時間かかる長帳場であり、そしてこの時期は陣痛と戦う苦しい時である。したがって、ただ傍観者として見ているだけでは『拒否や苦痛』の意識が増強される方が自然であると考えやすい。しかし、実習における分娩見学では、実際には産婦に付き添い、彼女の苦痛を軽減するためにあらゆる看護を実践していく。何時間もいっしょに呼吸法を実施し、マッサージをしているうちに産婦との共感性が生まれ、無事分娩に至った時点では学生自身が苦

痛体験を克服した気になり、出生の喜びと大きな感動を体験する。つまり自らの出産ではないにもかかわらず、大変近い位置で出産の疑似体験をしたことになる。森下¹⁵⁾や尾原ら¹⁶⁾は母性実習後、母性に対するイメージが良好となると報告している。今回特に明らかになったこととして、分娩見学において出産のその瞬間のみに立ち合った場合に比して、分娩第一期からのプロセスの中で、産婦とともに、ひとつの目標に向かうことが学生の母性意識、特に『拒否や苦痛』を著しく否定することにつながるということがあげられる。ヘレーネ・トイッチェ¹⁷⁾は、母性意識には苦痛を嫌わない気持ちも含まれると述べているが、まさにそのとおりである。

科・学年別は第1因子、第2因子両者の影響要因であった。3年課程である1N3年生が『すばらしさや喜び』を強く肯定する側に引っぱり、『拒否や苦痛』を強く否定する側に引っぱる属性となっている。この3年生は母性看護学の臨床実習を終了している時点であり、その影響が大変強いと考えられる。なお、1N2年生は母性看護学の講義を終了した時点であったが、両因子への影響を殆どもっていない。母性看護学の講義の受講だけでは母性意識に変化はみられないという岩崎ら¹⁸⁾の報告と一致する結果といえる。一方、2Nの学生の場合、2年課程であるため短大入学以前にほぼ全員臨床実習を経験しており、54%の学生はすでに分娩の見学もしていた。ところが2N1年生は『拒否や苦痛』を強く肯定する側に引っぱる属性となっている。彼女らの受けてきた臨床実習は母性意識に関与していないのか。この1Nと2Nの傾向の違いについて考えられることは、発達過程上の自己否定の時期との関連である。高校2年生頃に、女性であることや母親になること、すなわち自己の性に対して強く否定している者が多いとの報告¹⁾があるように、高校時代は母性性の発達がある意味で困難な時期ともいえる。この時期の対応次第では自己の性が歪められる可能性も考えられる。したがって、何らかの教育的な配慮が必要である。一方、大学3・4年生になると特に母性意識が高まるという発達過程上の特徴がある¹⁾。1N3年生の母性意識の高さは、臨床実習の影響にこれらの特徴がプラスされた結果といえそうであ

る。

なお、影響要因としては浮かび上がらなかった項目に「兄弟姉妹(よりみだ出生順位)」と「身近な妊産婦の存在」があげられる。「兄弟姉妹」に関しては一般的には幼い弟や妹の世話をすることによって、母性意識が育まれる⁴⁾⁵⁾といわれているが、本報では兄弟姉妹に関しては出生順位を質問したにとどまったので、弟や妹の世話の体験を適切に表しているとは考えにくい。したがって影響要因に入らなかったであろう。

「身近な妊産婦の存在」も同様にかかわりの内容を明らかにする必要があると思われる。

また、理解できない影響がみられた属性として、「母親との同一化」でどちらともいえないが、他と異なって『すばらしさや喜び』を否定的な側に引っぱる属性となっていること、「初経時の感想」で不安・困ったがイヤだと思ったと反対に『拒否や苦痛』を否定的な側に引っぱる属性となっていることがあげられる。これらに関しては今後の検討にまちたい。

得られた結果から、母性意識は多くの要因の影響を受けながら発達していくことがわかった。さらに、その影響の受け方は年代に左右されることが考えられる。したがって、母性意識の向上を目指した教育を効果的に行うには影響を受ける時期との関連を考慮する必要があることが示唆された。

VI. ま と め

1. 母性意識に関する質問の回答を因子分析することによって、『すばらしさや喜び』および『拒否や苦痛』と解釈できる2つの因子が抽出された。

2. 全員でみた因子別平均得点では『すばらしさや喜び』は肯定的であり、『拒否や苦痛』は否定的であった。前者を肯定する意識は後者を否定する意識より有意に高く、調査対象の属性からみて好ましい結果といえる。

3. 「初経時の反応」は「イヤであった」という拒否感が、好ましい母性意識の発達に対する強い障害となっていた。また、月経障害も母性性を苦痛に感じる要因であった。

4. 母性意識には子供の世話の経験や母親との関係が大きな影響を持つことが明らかとなっ

た。

5. 看護教育の中では、母性看護実習、とりわけ分娩見学が『拒否や苦痛』を否定的な側に強く引っぱる要因となっていた。分娩第一期から産婦に付き添い共感的に体験していくことがポイントである。

文 献

- 1) 平井信義：母性愛の研究，同文書院，東京，(1980)
- 2) 花沢成一：母性行動の成立，助産婦雑誌，**35** (9)，648—653，(1981)
- 3) 平井信義：思春期における母性意識の発達，産婦人科の世界，**33**(10・11)，858—1189，(1981)
- 4) 新道幸恵：母性意識の発達，看護 MOOK，**21**，27—32，(1986)
- 5) 村井文江，他：女子大学生の母性意識についての検討，思春期学，**9** (3)，247—253，(1991)
- 6) 花沢成一：母性心理学，医学書院，東京，(1992)
- 7) 新道幸恵，他：看護者の母性意識と母性行動，母性衛生，**18** (4)，118—120，(1978)
- 8) 松本清一：現代の母性，母性衛生，**14** (3)，658—667，(1986)
- 9) 村元淳江，他：初潮ならびに母性看護学履修がその後の母性機能に及ぼす影響について，母性衛生，**17** (1)，46—49，(1976)
- 10) 石川 中，他訳 (Hertz, D, G, et. al 著)：ライフサイクルからみた女性の心とからだ，医学書院，東京，(1986)
- 11) 斎藤益子，他：妊婦の母性意識とその形成に影響する因子，母性衛生，**33**(1)，64—70，(1992)
- 12) 西村知子，他：思春期女子とその母親との相互関係について——母性意識に焦点をあてて，母性衛生，**29** (1)，56—65，(1988)
- 13) 戸田和子，他：性役割受容性の意識構造とその習慣過程にかかわる父母，他人の効果，心理学研究，**58**，309—317，(1987)
- 14) 森下節子：看護学生の母性意識に対する一考察，看護教育，**24**，793—798，(1983)
- 15) 森下節子：看護学生の母性意識の発達，母性衛生，**33** (3)，297—303，(1992)
- 16) 尾原喜美子，他：母性看護学実習をとおして分娩のイメージを知る，第18回母性看護学会収録，(1987)
- 17) ヘレーネ・トイッチェ：母性の心理，日本教文社，東京，32—33，(1964)
- 18) 岩崎良子他：看護学生の母性意識についての調査，母性衛生，**16** (2・3)，45—48，(1975)